

【存在思想から生成思想へ】

●「在る」ことを出発点とする存在思想

キリスト教の解釈：存在理由は神が創造したから、存在目的は自己が救済されるため

啓蒙主義の解釈：存在が絶対（我思う故に我あり、自然権を主張）であり、自己を維持することが存在目的。

過去（存在理由も自己以前の歴史）も未来（自己保全以外の目的も自己以外の存在に対する責任も使命）も問わない。

資本主義、新自由主義の解釈：世界は弱肉強食の競争原理にある。

生き残り自己の富を増幅することが正義である。

従って、憲法という法的強制力をもって、絶対的存在の自己及び自己の権利を保全することが憲法制定の最大の目的

国は、上記目的を達成するために国民個人個人の同意によって契約的に形成しているもの

新自由主義においては、福祉は個人の責任であり、共助は不道德

◎「成る」ことを出発点とする生成思想

神道の解釈：存在理由は宇宙創元以来連綿として続く生成活動の中に生まれ成長するため。存在目的は宇宙全体の発展に寄与するため。

大和主義の解釈：世界は一体的成長発展原理にある。

万物の共存、共助、共生が正義である。

従って、国家の法は、人々が富に幸福を享受できる共助共栄の社会を保全発展させることが最大の目的

国家は上記目的を達成するために歴史経験を踏まえながら形成発展してきたもの

個人の幸福は共助社会全体の幸福の中から享受されるもの
（社会や他者を犠牲にする個人の幸福の追求は認めない）

◎ 歴史的経験そのものが国家の法である。

現行法が歴史的連続性にあるというのであれば、先ずは国家としての歴史的経験を確認し改めるべきところを改めるのが憲法改正の趣旨となる。その上で、国際情勢の変化への対応を検討し必要な改正を加える。

歴史的経験から断絶した革命法は、新国家の樹立と同じ。

現行憲法が革命法であるのならば、私達は新たに日本国家の則を定めて、占領状態を解放し日本を復活させなくてはならない。その魁として生命共同体を全国に創る。

日本固有法時代（氏族連合国家）の原理

◎ のり

「しろしめせ」「きこしめせ」「みそなわせ」の祈願があり
「しろしめす」「きこしめす」「みそなわす」包容同化が為され
その相互信頼の下に

「みことのり」「のり」がしめされ
それを「かしこみ」「うやまい」「つつしみ」うける

これが則（のり）であった。

「まがごと」「つみ」「けがれ」を
「はらう」他律的にもとの正しき状態に戻す
「みそぎ」自律的に元の正しき状態を維持する

◎ うじ・かばね・へ

うじ（氏）：うじ神を共有する共同体（血族親族ではない）天武天皇紀

うじの長は祭祀をつかさどる 旧字本紀物部氏系譜、続日本紀和銅七年の条
うじの長は氏人に対する一切の責任を持つ。

ゆえに軍の長であり、行政の長であり、司法の長

うじの長はうじ人ら各人が定めて申し送る(直接民主制) 日本書紀天武天皇

かばね（姓）：個人の尊貴称号（真人、臣、連等）

うじ人が、かばねの尊称を与える。

へ（戸）：親族の小集団（竈を一つにする家族）いえぎみ、やから、やっこ

支那法・律令格式（統一国家）の原理

原因：経済発達、仏教儒教思想の普及、隋唐等大国出現による国際競争への参画

◎ 律令格式の制定

それまで日本に無かった中央統治国家の制度（班田収授制度、租庸調制度等）を
支那の制度から導入

日本固有の制度（皇室法、戸制度等）はそのまま制度化

ポスト立憲主義の考え方

1 【法が主ではなく、人々が主の国家へかえる】

間接民主主義や自由主義では、直接民主制とは違い、国民に選挙権は与えるものの、国の意思決定に国民を参加させません。これは、意思決定を何者かに支配占有された政治体制です。法を隠れ蓑に専制的権力の行使を可能とするのが立憲主義です。立憲主義という法による専制支配から、人々の意思で社会を育む国家へ移行しなくてはなりません。

『のり（則）』を元に法を定める。

◎『人々のいのり（祈り）』こそ人々が望む社会の在り様

祈りは祝詞（のりと）として神に奉る

祝詞（のりと）は「いのり」であり「のり」を「となえる」こと

◎『主体性ある祈り』は自立的社会を育む

「しろしめせ」「きこしめせ」「みそなわせ」との祈りには

自ら「思考え」、「言葉にし」、「実行する」という主体性がある。

服従や他力本願の祈りとは異なる。

◎『人々の祈り』に対して神の同意があれば神勅（かみののり）と成る

神・自然が人々の祈りを「しろしめす」「きこしめす」「みそなわす」したものが神勅

人々は、人々の祈りが神に受け入れられれば感謝し、受け入れられなければ反省し

これを神勅として「かしこみ」「うやまい」「つつしみ」受け賜う

例：① 祈年祭【五穀豊穰を祈る】

② 自然の力とともに人々がテマヒマ懸けて農を営む【祈りを自ら実践する】

③ 新嘗祭【五穀豊穰に感謝する。不作凶作の場合は反省する】

このプロセスが則（のり）

建国の祈りは、一つの屋根の下に共に暮らす家族のような国を人々が協心努力して創り為すことでした。

そのほかにも、毎年、折々に、人々の思いを祝詞として祈り、

その祈りを実現するために皆共に努力し、

その努力が実れば感謝し、

努力が不足したか、努力の甲斐なく事が成らなければ反省し、

それを次に生かして祈りを繰り返す。このような生き方に法はいりません。

◎『人々の祈り』をしらす天皇が、人々にお言葉をかける。これがば詔勅（みことのり）

天皇の御位は、人々の心をしろしめし、『民安かれ国安かれと』神々に祈るもの

その御位にある天皇が、民にしめすのが詔勅（みことのり）

詔勅（みことのり）は、人々の祈りを具現化する則（のり）

天皇の祈りが在所共同体を国家として統合

天皇陛下は、人々の心を、しろしめし（深い信頼と敬愛を持って包容同化し）、その人々が祀る神を敬い、その人々が祖先から継承する伝統文化を尊重し、人々の弥栄のために、一日も欠かすことなく朝に夕に全身全霊で祈りを奉げる唯一無二の御存在です。

国民を思う天皇陛下の大御心と、大御心に感謝し、報恩の念をもって日々力を尽くす人々との心の絆が、日本という国家を統合形成する原理です。

つまり、お互いがお互いのことを思うことで成り立つ社会では、強制作用としての法は必要ありません。

ただし、これが成立するための条件は、上に立つ人が下の人を思う心を有しているということです。選挙で選出された人にこれを求めても不可能です。

幸いなことに私達は天皇陛下をいただいております。私達の国には、法という絶対強制力によらなくとも国家社会を営んでいける伝統基盤があるのです。

例：【仁徳天皇・勅・紀・七年四月一日】

其れ天（かみ）の君を立つことは、是れ百姓（おほみたから）の爲めなり。然らば則ち君は、百姓を以て本と爲す。是を以て古の聖王は、一人も飢ゑ寒（こど）ゆれば、顧みて身（おのれ）を責めき。今ま百姓貧しきは、則ち朕が貧しき也。百姓富めるは、則ち朕が富める也。未だ百姓富みて、君の貧しきこと有らじ矣。

「しろしめし」「祈る」という行為は、他者を理解し他者の幸福を祈る「利他のための自己」という価値規範を体現しています。

また、これに感謝し報いるということは、主体的にその価値に賛同することです。これが、共同体間の紛争を抑制し、強制によらない自律的な平和環境を創造する原理です。

神勅や御歴代天皇の詔勅、祖先の祝詞を累算編綴し、私達の慣習法を再定義しましょう。

今上陛下の詔勅を承たまわったならば必ず謹しみましょう。それは私達の祈りへの答えなのです。

2 【中央集権統治から、在所共同体による国家統治へかえる】

人々が集団で他者の土地に移動し、その土地の風土や文化に同化することなく定住し、あるいは、在所共同体を消滅させることは、生態系を破壊し紛争や戦争を引き起こす原因となります。人々の集団移動が無くとも、その土地の生命の歴史に敬意を払わず、利益獲得のため土地を占有し、風土や文化に干渉し、在所共同体の日常を脅かすことも同様に生命活動に反する行為です。

在所共同体を破壊する国家や世界は、不当な権力（武力や法）で統治しますが、継続できません。競争原理は、こうした罪や穢れを時として正当化し、世界の生命活動を危機に陥れます。

人間が社会生活を持続的に続けるためには、その共同体社会を土地（自然風土）の上に打ち立てるしかありません。また、自然風土とは個々の生命活動の総称であり、相互に深く結びついているので分割できません。ですから、分割して人間が所有することは、それだけで自然風土を破壊します。

個々の生命活動は人間が規定するような権利に基いて生きているわけではありません。それは、自然全体の創造と成長活動の表れであり、生まれてくる個々の生命は、全体にとって有用だから生きています。自然に不要で適合できないものは必ず自然によって淘汰されます。

◎ 在所共同体が国家・世界の礎

その土地の自然風土、産土神（土地のエネルギー）、歴史と未来、祖先と子孫、全ての生き物と一体となって生きる人々が在所共同体。在所共同体の人々は、その土地の歴史を継承し未来を創造するため、土地の生命活動に加わり、全力で生を全うする。

在所共同体の生命活動は、人間が地球そして宇宙の生命活動に参画するもの。この在所共同体があつての国家、そして世界。

◎ 在所共同体の秩序

天地自然の中では交換価値という資本主義的な尺度は見当たらない。その土地の自然の一部として、人間が自然の生命活動に加わり、働きかけたことによってもたらされる豊かな恵みを分け合えば十分に生きていける。在所共同体の秩序は、このような共同生命活動によって保たれる。

共同体での最も大事な秩序は他者を思う心と報恩感謝。何かを必要としている人や共同体があれば(需要)、それを提供できる人や共同体が与える(供給)。必要なものを頂いたら感謝し恩に報いるように努める。報恩感謝の先は、当事者間の場合や、自分と同じような境遇の他者や共同体への場合もある。また、親から受けた恩を子供に返すように、過去の恩を未来に還す報恩もある。思いやり→感謝→報恩のポジティブなサイクルを共同体の原動力とすれば、社会は間違いなく良い方向に変化する。

◎ 在所共同体から選出された代表によって国家が運営される

在所共同体は、親族の小集団（竈を一つにする家族）から成り、独立した自治行政、司法、立法権並びに軍権を有する。

共同体は、共同体の長は共同体の人々によって任免される。長は、共同体の人々に対する一切の責任を持つと同時に、祭祀をつかさどり、共同体の行政、司法、立法、軍の長として役割を果たす。

国家の運営は、天皇陛下によって承認された各共同体の長（若しくは各共同体の長の代表）による議会によって運営される。中央の組織、権限（行政権、司法権、軍権、国際交渉権等）は固定化せず、この代表議会によってそのつど決定される。

◎ 大和主義国家の創設

大和主義とは、人々が、信仰、民族、歴史、伝統、文化等の違いを受け入れて、共存共栄を祈り、大きく和する社会の創造にむけて実践する活動である。

自然に親しみ、互いに信頼し敬意を持って睦み、苦楽を共にして助け合い、明るく清く正直な心を持って、世のため人のため日々の生活に励む文化を共有することで、強制によらず自律的に争いを抑制し、一人ひとりが、社会全体の成長発展に貢献することに意義と喜びを自覚できる国家を目指す。

大和主義に基づき、国家を形成する目的は、在所共同体生命活動を保全し、それぞれの在所共同体間の共和協力をはかり、全体としての成長発展を助けるため。

国家の政は、在所共同体の自主自立した自治を尊重し、天皇陛下の祈りを具体化して在所共同体の人々の幸福と弥栄を実現すること。そして、天皇陛下を中心に総ての在所共同体が一体となって、一つの家のような国造りをたゆまなく継続できる環境を醸成するため。

◎ 国家の政（政治、行政、司法、教育、防衛）の府

在所共同体の代表議会は、以下の政務の責任を果す。

- 皇室国家次いで在所共同体の夫々の伝統的慣習法を犯すことはしない。
- しろしめす天皇を輔弼：政府は、国民の実情と心情を正しく把握し天皇に知らせ、天皇の大御心を正しく奉戴し国民に伝える。
- 国民の祈りを祝詞として奏上し、その祈りの具現化を図る。
- 天皇の詔勅があれば、それを具現化するための方策を執る。
- それぞれの在所共同体の自治を保障し保全する。
- 各共同体間の共和協力を促進し、係争を調停する。
- 国外にも大和主義をもって対応する。仮に、国家あるいは在所共同体に対する有形無形の攻撃があった際には、全ての共同体を束ね大和魂を奮起して応戦する。